

「まずは手の届く目標を定め、それをクリアすることで、本格的な事業承継を進めるきっかけになります。親子の経営者としての関係づくりに欠かせないステップでした」

そう話すのは、一九年四月から井上さん親子を担当するTAC・北部営農支援センター課長の日野昭憲さん。前任のTACが親子同席でのヒアリングを四回重ね、それ以外にも日常的に訪問して、こまめな進捗管理をしたことで、剛樹さん

親子が同じ方向を向く

「まずは手の届く目標を定め、それをクリアすることで、本格的な事業承継を進めるきっかけになります。親子の経営者としての関係づくりに欠かせないステップでした」

と、剛樹さん。父子の考えを整理できたところで、剛樹さんの農業次世代人材投資資金の申請のサポートをTACが提案した。営農が忙しく、なかなか申請の準備が進まないことが、親子げんかの一因となっていたからだ。

「TACが上手に進めてくれるのでありがたいですよ。農業技術にしても、事業承継にしても、おたがい知識が足りないのに話そうとするから言い合いになっていた。そこを助けてくれたのがTACです。話し合いも日程を決めて同席してくれるから、さてやるか、となりますね」

は農業次世代人材投資資金の申請準備を整えることができた。日野さんは担当になってすぐ、親子二人が同じ方向を向いていると実感したそうだ。徹郎さんが日野さんと視線を交わしつつ、こやかに話す。

「TACが上手に進めてくれるのでありがたいですよ。農業技術にしても、事業承継にしても、おたがい知識が足りないのに話そうとするから言い合いになっていた。そこを助けてくれたのがTACです。話し合いも日程を決めて同席してくれるから、さてやるか、となりますね」

それに剛樹さんが続ける。「申請手続きも事業承継も、たいへんだ、という認識はありました。だから逃げていた。どうしたいへんなのかわかったことで、やっと取りかかることができました」

事業承継の土台はできた。今後は経営拡大計画の作成を進めるといふ。そして親子への技術・経営継承をめざし、親子とTACは手を携えて歩んでいく。

事業承継の第一歩！ TACが親子の架け橋になる

—— 愛媛県 JAえひめ中央

農業の家族経営における事業承継は、親（先代）にとっても、子（後継者）にとっても初めての経験。しかも、世代が異なることで、考えが違うのは当然だ。どうしたらいいかわからない戸惑いや不安を取り除き、親子の衝突を防ぐ。TAC（地域農業の担い手に出向くJA担当者）の根気強い取り組みを追いかけた。

吉田真也＝写真 photo by Shinya Yoshida JA全農TAC推進課＝企画協力



写真左から日野さん、徹郎さん、剛樹さんと2019年5月に生まれた息子の響太くん。妻の沙織さん(32)、林さん。このハウスでは「紅まどんな」を生産する



STEP 2 親子がよい雰囲気で作成 ライフプランを作成

井上さん親子の場合、最初の目標である農業次世代人材投資資金の申請が完了したところで、事業承継ブックに掲載されている「ライフプランを立てること」からの活用をTACが提案する予定だ。親子の話し合いがスムーズになったことで聞かれるようになった、子の住宅購入など、営農以外の中長期的な家族の夢の実現も盛り込み、経営拡大をサポートしたい考えだ



JA全農のHPで
事業承継ブックを
公開中!



イラストはJA全農TAC推進課と地上編集部によるコラボキャラクター「TACマン」

STEP 1

事業承継ブックで予習し、聞き取りに臨む

農家親子へのヒアリングでは、まず親子の意向や認識のずれを探り、親子の話し合いが進まない原因を見つけることに十分な時間をかけることを重要視している。親子の前で事業承継ブックを広げて、最初のページから順に進めていくのではなく、ブックの内容をTACがしっかり予習したうえで、ヒアリングに臨み、自然な会話の流れのなかで聞き出し、JAに戻って整理するようにした



じっくり
親子の本音を
聴こう



JAえひめ中央

3市3町を管内とし、「温州みかん」「いよかん」「デコポン」「紅まどんな」などの柑橘を中心とした果樹、米麦、野菜、花卉・花木と幅広い生産が行われている。2017年度は1人、18年度は4人だったTACが、19年度から14人体制となった。農産技術員が兼務し、圃場での技術指導を契機に、他部署や行政と連携し、TACの強みである経営提案につなげている。

事業承継に取り組まなければ。JAえひめ中央管内の農家・井上剛樹さん(30)の思いをTACが知ったきっかけは、地域の若手農家を対象としたアンケートだった。

これを受け、二〇一八年一月、さつそく剛樹さんと父・徹郎さん(55)にヒアリングを行った。当時のTAC管理者で、営農部経営支援課調査役の林論さんが振り返る。

「まずは徹郎さんと剛樹さん、別々に話を聞きました。これまでどんな営農をしてきたのか、将来それをどうしていきたいのかなど、世間話を交え、堅苦しい雰囲気にならないように気をつけました」

井上家は、徹郎さんが水稲と園芸を、剛樹さんが柑橘を中心に営農している。ヒアリングで、剛樹さんは柑橘にさらに注力し、生産基盤を確立したい考えであること、徹郎さんもそれを後押ししたいと思っていることがわかった。

「就農して四年。自分なりのやり方がわかってきて、ちよつとしたことで父と言いつつ